

日本語教育における待遇表現の研究

北 直 美 *

A Study of Politeness in Teaching Japanese as a Second language.

Naomi Kita *

Received October 30, 1995

0 はじめに

近年、日本語学習者は増加し、多様化する傾向にある。学習者が学習困難であると予想される項目のひとつとして待遇表現があげられる。待遇表現はその形式も多く、学習者により必要性が大きく異なることなどから指導すべき形式の確立も困難であると推測される。

本稿では、ビジネスマンや接客業に必要な待遇表現ではなく日本語学習者の日常生活に必要な買い物や銀行、学校などの場面で使用される待遇表現という観点から、日本語学習者に指導すべき形式を考察したい。買い物や銀行など実際の生活場面での談話における待遇表現の形式を分析し、それをもとに日本語教科書に提出されている待遇表現の形式の見直しを行うとともに、指導すべき待遇表現の選定を試みたい。

1 待遇表現指導の問題点

1.1 これまでの研究における待遇表現の定義

日本語教育学会編 (1982) によると待遇表現とは「話し手・書き手が、人間関係への心配りのもとで、話したり書いたりすること、また、その言語形式としての語句や文。人間関係への配慮のもとでの言語表現。」と定義されている。

蒲谷・坂本 (1991) は「待遇表現とは、表現主体が、ある表現意図を、自分・相手・話題の人物相互間の関係、表現場の状況・雰囲気、表現形態等を考慮し、それらに応じた表現題材、表現内容、表現方法を用いて、表現する言語行為である。」と定義している。前者の配慮の対象は人間関係のみであるのに対し、後者は表現場所や表現形態も考慮の対象としている。同じ人物に対する言語表現でも、公的な場所と私的な場所では表現が異なることなどから表現場所が配慮または考慮の対象となることは明らかである。表現形態についても同様のことが言えよう。また、前者は言語表現のみを待遇表現としているのに対し、後者は言語行為も待遇表現と

* 留学生別科
Japanese Language Course

しており、待遇表現の範囲を広くとらえていると言えよう。

菊地 (1989) は「基本的には同じ意味のことを述べるのに、話題の人物／聞き手／場面などを顧慮し、それに応じて複数の表現を使い分けるとき、それらの表現を待遇表現という。」と定義付けをしている。菊地の場合、先の二者とは異なり、複数の表現を使い分けるが基本的には同じ意味であることを明示している。菊地によると待遇表現はマイナス、ゼロ、プラスの待遇的意味を持ち、それらの待遇的意味を持った表現がそれぞれ軽卑語、普通語、敬語のような表現になると述べている。

1.2 待遇表現の定義

前節での考察から、本稿では以下の定義のもとに待遇表現という言葉を使用する。

表現主体が基本的には同じ意味のことを述べるのに、自分・相手・話題の人物などの人間関係、表現場所の状況や雰囲気、表現形態などを考慮し、それらに応じて複数の表現の中から適切な待遇的意味を持った表現を選択して使い分けるとき、それらの表現を待遇表現という。

待遇的意味にマイナスからプラスまでの段階があるとすれば、どのような表現を取り上げても、待遇的意味を持つことになる。つまり、すべての言語表現が、何らかの待遇的意味を持つ待遇表現と言うことになる。しかし、すべての言語表現について言及するのは難しいため、本稿では敬語、その中でも特に動詞に関わる表現の形式を取り上げたい。

ここで敬語について考察しておきたい。日本語教育学会編 (1982) によると敬語とは「待遇表現のうちの丁寧な言い方。話し手・書き手が、聞き手・読み手、または話題の人物に対する待遇配慮から使う丁寧な表現。」と定義されている。ここで注意したいのは、敬語とは敬意を表す表現ではなく丁寧な表現としていることである。

辻村 (1980) は敬語は必ずしも敬意に基づいて用いられるとは限らないことを指摘し、例として、敬意を持たない上司に対してでも、公的な場所では敬語を用いて話すというような事実があることをあげている。宮地 (1985) は現代敬語は社交的場面に基づいて礼儀の意識で使われる傾向が強いと述べているが、これは辻村の例にもあてはまるものである。

本稿で使用する敬語は日本語教育学会編に従うものであり、敬語という文字から連想するような敬う言葉という意味ではなく、むしろ丁寧な表現ということの意味する。ただし、ここで丁寧な表現とは、丁寧語¹⁾とは異なり、配慮の対象を聞き手だけに限らない。

1.3 待遇表現指導の問題点

日本語教育における待遇表現の指導については、これまで様々な問題点があげられているが、もっとも多く指摘されていることは待遇表現の中でも特に敬語の習得の難しさであろう。²⁾ 前節の定義から考察すると、待遇表現は様々なことを考慮しながら表現形式を選択せねばならない。実際の使用場面では人間関係、表現場所などに対する様々な考慮の他に、瞬時に適切な敬語形式を判断し、選択せねばならないという問題も加わる。この判断は学習者個人にゆだねられるものであるが、学習者はそれぞれの文化背景を持つことから、必ずしも日本社会で期待さ

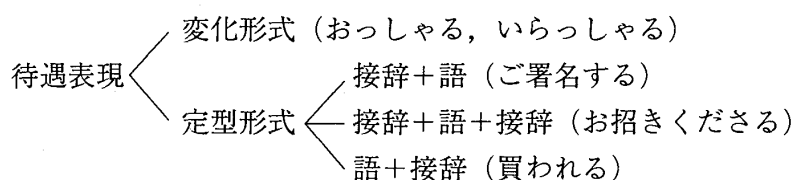
れるものと同じとは限らない。以上のようなことから教室という限られた範囲での学習では、敬語の習得は非常に困難なものと推測される。

しかし、初級ないし中級レベルの学習者に対する指導では、これらのこと以前に解決されなくてはならない問題があると推測される。その問題のひとつとして指導すべき待遇表現があまり確立されていないことがあげられる。北條(1978)は初級段階では敬語のどのような形を教えるべきかが見過ごされているということを指摘しているが、指導すべき表現が確立されていないのは初級だけでなく中級についても同様である。これは学習者のニーズにより指導すべき表現が異なってくるためと推測される。つまり、学習者別に指導すべき待遇表現の確立が必要である。現在、ビジネスマンや接客業など特別に敬語を多く必要とする学習者への指導⁽³⁾は比較的進んでいるが、その他の日本語学習者の日常生活に必要な買い物や銀行などの場面で使用される待遇表現の指導はあまり行われていない。

そこで本稿では、日本語学習者の日常生活において必要な待遇表現の形式を選定したい。

2 待遇表現の形式

本稿では、待遇表現を「変化形式」と「定型形式」⁽⁴⁾の2つに分けたい。「変化形式」とは、ある表現が一定の規則を持たずに変化する形式である。「言う」から「おっしゃる」などの変化がその例としてあげられる。「定型形式」とは接辞と語⁽⁵⁾で成り立ち、これらがある一定の規則を持って変化する形式である。例えば、「お招きくださる」の場合は接辞「お」、接辞「くださる」が基準となり、語「招く」だけがマス形に変化するというものである。この「定型形式」はさらに「接辞+語」の型、「接辞+語+接辞」の型、「語+接辞」の型の3つに分けられる。まとめると以下のようになる。



ただし、本稿では挨拶などの定型表現は取り上げないものとする。

2.1 談話における待遇表現

ここでは買い物や銀行など実際の生活場面での談話⁽⁶⁾に現れる待遇表現の形式を考察し、その特徴を明らかにしたい。

『主婦の一週間』はある主婦の一週間の行動を追跡調査したものであり、買い物、銀行、電話での会話など日常生活に密着した会話が多く、日本語学習者の日常生活に最も近いものと判断できる。しかし、ここでの登場人物のほとんどが女性であることや、調査対象となった主婦の行動範囲は限られていることなどから、これを補うため『談話語データ』、『知識階層』を用いた。『談話語データ』、『知識階層』の場面としては研究室での先生との会話や仕事を探す場面での会話などがみられた。以上3種類は談話の文字化資料であるが、『敬語意識』は実際の

談話を文字化したものではなく、ある場面設定のもとで選択された表現を記録したのものである。これは道聞きや病院など3種類の談話資料に現れなかった場面を補うものとして用いた。

本稿では尊敬の待遇表現の形式を「尊敬形式」とし、謙譲の待遇表現の形式を「謙譲形式」と呼ぶことにする。尊敬語については宮地(1976)などの説が定説となっているが、謙譲語については、その説は様々である。菊地(1989)によれば謙譲語は大きく2つに分けることができる。話し手が第三者などの補語を高める表現と、一般に聞き手への丁重さを示す表現である。菊地は前者を謙譲語Aとし、後者を謙譲語Bとした。本稿においても同様に「謙譲形式」を「謙譲A形式」と「謙譲B形式」とに分けることにする。

資料1は談話における待遇表現の形式の出現回数をまとめたものであり、資料2は資料1中の変化形式のみの出現回数をまとめたものである。資料1、資料2ともに尊敬形式、謙譲形式(A, Bを含む)に分けて出現回数をまとめた。表の括弧内の数は尊敬形式と謙譲形式の合計数である。談話に現れた待遇表現の形式のうち、出現回数が100以上のものを出現頻度の高い形式とし、50未満のものを出現頻度の低い形式とする。

談話資料を出現回数、出現場面という観点から分析した結果、以下のことが言えよう。

- (1) 「おーになる」、「ーていらっしゃる」、「おっしゃる」は出現頻度が高く、「おーになる」、「ーていらっしゃる」については4種類の分析資料すべてに現れていること。また、「おーいただく」は、あまり出現頻度の高い形式とは言えないものの、「ーていただく」とほぼ同じ場面で使用されており、これらを合わせて考えれば出現頻度は高いということ。
- (2) 「ーせていただく」、「ーており(ます)」、「おーください」は出現頻度が高いということ。また、これらに加え、「ござい(ます)」、「おーです」の出現場面は店や病院など日常生活に深くかかわる場面であること。
- (3) 「ーてくださる」、「いらっしゃる」は出現頻度が高いうえに、特別な相手だけではなく、親しい者同士などにも広く使われているということ。
- (4) 「ーれる／られる」は出現頻度が高いデータと高いとは言えないデータがあり、その使用には揺れがあること。また同様に、「おーする」も出現頻度の高いデータと高いとは言えないデータがあること。
- (5) 「亡くなる」は出現頻度の高い語彙ではないが、「死ぬ」という意味を表す場面では、すべて「死ぬ」ではなく「亡くなる」が使用されていること。

2.2 日本語教科書における待遇表現

ここでは初級及び中級の日本語教科書にどのような待遇表現の形式が提出されているかについて考察し、その特徴を明らかにしたい。

分析にあたっては、諸機関でよく使用されている総合教科書であるという条件を満たした5冊の初級教科書と3冊の中級教科書⁽⁷⁾を対象とした。これらの日本語教科書の会話またはダイアログ部分(以下、会話部分と略する。)と文型または文法説明部分(以下、文型部分と略する。)に、どのような待遇表現が提出されているかを分析した。なお、前節と同様に挨拶などの定型表現は取り上げないものとする。

資料3は日本語教科書における待遇表現の提出回数をまとめたものであり、資料4は資料3

中の変化形式のみの提出回数をまとめたものである。表の括弧内の数は尊敬形式と謙譲形式の合計数である。資料3中の形式のうち、上段は会話部分に、下段は文型部分に提出されているものである。なお、上下段に分かれていないものは会話部分にしか提出されていなかったものである。8冊の日本語教科書に提出された待遇表現の形式のうち、提出回数が30回以上のものを提出頻度の高い形式とし、10回未満のものを提出頻度の低い形式とする。

日本語教科書を提出回数、提出部分という観点から分析した結果、以下のことが言えよう。

- (1) 「おーになる」、「いただく」は8冊の教科書すべてに、「おーする」、「いらっしゃる」は7冊に、「ーてくださる」、「ーていただく」は6冊に提出されており、それぞれ提出頻度の高い形式であること。
- (2) 「ーていらっしゃる」、「おーいただく」、「お目にかかる」、「ごさい(ます)」、「御存じ」、「ご覧になる」、「おり(ます)」などは提出頻度の低い形式であること。
- (3) 提出回数そのものは多くないが、「ーれる／られる」、「ーせていただく」は会話部分よりも文型部分で多く提出されており、「おーください」、「ーており(ます)」は文型部分よりも会話部分で多く提出されていること。
- (4) 「おっしゃる」、「なさる」については7冊の教科書に、「いたし(ます)」については8冊の教科書すべてに提出されているが、全体的な提出回数は多くないこと。
- (5) 「くださる」、「さしあげる」など主に初級教科書に提出されているものと「申し(ます)」、「うかがう」、「まいり(ます)」など主に中級教科書に提出されているものとに分けられること。

3 日本語学習者に指導すべき待遇表現

3.1 選定の基準

日本語学習者に指導すべき待遇表現の形式を選定するために、2.1で考察した談話における待遇表現の形式と2.2で考察した日本語教科書における待遇表現の形式との間にどのような差があるのかを比較したい。差のタイプとして以下の4種類が考えられる。

- (1) 談話の出現頻度、日本語教科書の提出頻度共に高く、両者の間に差がないもの。
- (2) 談話の出現頻度、日本語教科書の提出頻度共に低く、両者の間に差がないもの。
- (3) 談話の出現頻度は高いが、日本語教科書の提出頻度は高くないため差があるもの。
- (4) 談話の出現頻度は低いが、日本語教科書の提出頻度は低くないため差があるもの。

(1)は出現頻度が高いことから形式の重要性が認められ、提出頻度が高いことから形式の重要性の高さが評価されているものと推測される。本稿においても(1)の形式の重要性を認め、日本語学習者に指導すべき形式とする。また、(2)は出現頻度が低いことから形式の重要性が低く、提出頻度が低いことから形式の重要性の低さが認められたものと推測される。本稿では(2)の形式が日本語学習者の日常生活との関わりの深い場面で出現するならば指導すべき形式とする。

(3)、(4)は出現頻度と提出頻度の間に差があるものである。ここでの差が大きければ大きいほど実際の談話での形式と指導している形式とが離れているということである。本稿では日本語学習者の日常生活に必要な待遇表現を考察するため、主に談話での出現頻度を重視する。つまり、(3)では従来指導していなかった形式を新たに指導すべき形式として加えることになるが、

(4)では従来指導していた形式を指導しなくてもよい形式として取り除くことになる。

3.2 指導すべき待遇表現の選定

ここでは前節の基準をもとに日本語学習者に指導すべき待遇表現の選定を試みたい。

まず、(1)の出現頻度、提出頻度共に高い形式について考察したい。尊敬形式では「おーになる」、「ーてくださる」、「いらっしゃる」の3種類であり、謙讓A形式では「ーていただく」、「おーする」、「いただく」の3種類である。謙讓B形式では(1)の形式は見られなかった。また、「おーです」は厳密には(1)に属さないが、出現頻度、提出頻度共に低い形式ではない。店員と客などの会話で現れていることから日常生活との関わりの深い形式と判断できる。このことから、(1)の6種類の形式に「おーです」を加えた7種類の形式の重要性を認め、日本語学習者に指導すべき形式として選定する。

次に(2)の出現頻度、提出頻度共に低い形式について考察したい。尊敬形式では「おーくださる」、「御存じ」、「ご覧になる」、「亡くなる」の4種類である。謙讓A形式では「おーいただく」、「ーてさしあげる」、「拝見する」、「お目にかかる」、「おー申し上げ(ます)」、「存じ上げ(ます)」の6種類であり、謙讓B形式では「おーいたし(ます)」、「ーてまいり(ます)」、「おー願ひ(ます)」、「おり(ます)」、「存じ(ます)」、「かしこまり(ました)」、「あがる」の7種類である。これらの17種類の形式のうち「亡くなる」は「死ぬ」という意味を表す場面では、すべて「死ぬ」ではなく「亡くなる」が使用されていることから、出現頻度は低いものの重要な形式であると判断できる。また、「かしこまり(ました)」は店員と客との会話で多く現れていることから日常生活との関わりが深いものと判断できる。また、「くださる」、「うかがう」、「申し(ます)」、「まいり(ます)」は厳密には(2)に属さない。しかし、「くださる」については「くれる」は定型形式とは結びつかないため、その尊敬形式は「くださる」だけであり、「まいり(ます)」については「行く」の謙讓形式は定型形式とは結びつかないため、「まいり(ます)」だけである。「うかがう」については「聞く」、「尋ねる」、「訪れる」など多くの意味に対応することから重要であると判断できる。「申し(ます)」については電話などの会話で現れている。日常生活で電話は不可欠であることに加え、学習者の日常生活では自己紹介を行う機会も多いことが予想される。以上のことから「亡くなる」、「かしこまり(ました)」に「くださる」、「うかがう」、「申し(ます)」、「まいり(ます)」を加えた6種類の形式を指導すべき形式として選定する。

次に(3)の出現頻度は高いが、提出頻度は高くない形式について考察したい。尊敬形式では「おーください」、「ーれる/られる」、「ーていらっしゃる」、「おっしゃる」、「なさる」の5種類である。このうち、差が顕著であった形式は「ーていらっしゃる」、「おっしゃる」であり、特に「ーていらっしゃる」については提出頻度は低い形式である。「ーていらっしゃる」は4種類の談話資料すべてに現れていることから、日常生活でよく使用されていることがわかる。また、「おっしゃる」についても『敬語意識』を除くすべての談話資料に現れている。『敬語意識』で全く現れていないのは「おっしゃる」を選択する場面設定が行われていないためと推測される。このことから「おっしゃる」も日常生活でよく使用されているものと判断できる。「おーください」については『主婦の1週間』では出現頻度が低くなっているものの全体的には出現頻度の高い形式となっている。相手に物事を勧める場面や相手の間違いを婉曲に訂正する場合

などに多く使われていることから形式の重要性を認めることができる。「一れる／られる」については全く提出されていない教科書と多く提出されている教科書とに大別でき、揺れのある形式であると言えよう。しかし、談話における出現頻度に加え、その規則性や将来性などもふまえて考察すれば、「一れる／られる」は指導すべき形式であると言えよう。「なさる」については出現頻度に加え、「名詞＋する」という形の動詞すべてと結び付くことから形式の重要性を認めることができる。次に(3)の謙讓 B 形式として「一せていただく」があげられる。この形式は4種類の談話資料すべてに現れていることから日常生活でよく使用されているものと判断できる。また、「一ており(ます)」、「いたし(ます)」は4種類の談話資料すべてに現れており、「一ており(ます)」については店や病院など日常生活との関わりの深い場面で使用されている。また、「いたし(ます)」についても「名詞＋する」という形の動詞すべてと結び付くことから形式の重要性を認めることができる。なお、(3)に該当する謙讓 A 形式はみられなかった。また、厳密には(3)ではないが、「ござい(ます)」は店員と客とのあいだで多く現れていることから日常生活との関わりが深いものと判断できる。以上のことから「おーください」、「一れる／られる」、「一ていらっしゃる」、「おっしゃる」、「なさる」、「一せていただく」、「一ており(ます)」、「いたし(ます)」に「ござい(ます)」を加えた9種類の形式を新たに追加指導すべき形式として選定する。

次に(4)の出現頻度は低い、提出頻度は低くない形式についてであるが、これに相当する形式は尊敬形式、謙讓 A 形式、謙讓 B 形式のいずれもみられなかった。

以上のことから日本語学習者の日常生活には次の22種類の待遇表現の形式が必要であり、指導すべきであると考えられる。

- (1) 尊敬形式については「おーになる」、「おーです」、「一てくださる」、「おーください」、「一れる／られる」、「一ていらっしゃる」、「いらっしゃる」、「おっしゃる」、「なさる」、「くださる」、「亡くなる」の11種類の形式である。
- (2) 謙讓 A 形式については「一ていただく」、「おーする」、「いただく」、「うかがう」の4種類の形式である。
- (3) 謙讓 B 形式については「一ており(ます)」、「一せていただく」、「いたし(ます)」、「申し(ます)」、「まいり(ます)」、「ござい(ます)」、「かしこまり(ました)」の7種類の形式である。

これらの形式は日本語学習者が日常生活で必要となる最低限の待遇表現の形式であるため、学習者の必要に応じて指導する形式を増やすことも考えねばならない。

4 まとめと今後の課題

これまでの日本語教育における待遇表現の指導では学習者に指導すべき形式の確立が成されていなかった。その理由として待遇表現の形式が多いことや学習者により必要性が異なることなどが推測された。指導すべき形式を確立するためには対象となる学習者を設定することが必要であり、本稿ではビジネスマンなどの待遇表現の必要性の高い学習者ではなく一般の初級ないし中級学習者を対象とし、買い物などの日常生活に必要な待遇表現について考察した。この日常生活に必要な待遇表現という観点から実際の談話における待遇表現と日本語教科書におけ

る待遇表現との差を比較，考察したうえで，22種類の待遇表現の形式を指導すべき形式として選定した。

今後はこれらの形式を指導する順序や段階が問題となってくる。また，本稿ではプラスの待遇表現を中心に考察を行ったため，指導すべき待遇表現の形式として22種類の形式しか取り上げなかったが，日常生活に必要な待遇表現はプラスのものばかりではない。ゼロまたはマイナスの待遇表現の研究も必要であり，プラスの待遇表現の研究を含め，より新しい談話資料の分析を行わなければならない。以上は今後の課題として研究を行いたい。

注

- (1) 宮地 (1976), pp.107-116
- (2) 蒲谷・坂本 (1991), pp.23-25 など。
- (3) 高見澤孟 (1986) 『EXECUTIVE JAPANESE 1-3』, ASMIK CORP.,
横山信子 (1992) 『接客にほんご会話』, 三修社などがあげられる。
- (4) 国立国語研究所 (1992) の「自立形式」, 「接辞形式」とほぼ同じものである。
- (5) ここでの「語」とは自立語を指し, 「接辞」とは「語」に付属するものという意味で用いるため, 補助動詞, 助動詞を含むものとする。
- (6) 国立国語研究所 (1983) 『敬語と敬語意識—岡崎における20年前との比較—』 (国立国語研究所報告77), 三省堂,
————— (1990) 国立国語研究所言語処理データ集4『談話語の実態』データ,
井出祥子他編 (1984) 『主婦の一週間の談話資料解説・本文編』, 三勇社
野元菊雄他 (1980) 『日本人の知識階層における話ことばの実態』 文部省科学研究費特定研究「言語」「日本語教育のための言語能力の測定」資料集1
- (7) 小出詞子 (1985) 『日本語 (にほんご/にっぽんご)』, 開拓社,
国際交流基金日本語国際センター (1981) 『日本語初歩』, 凡人社,
————— (1990) 『日本語中級Ⅰ』, 凡人社
海外技術者研修協会 (1990) 『新日本語の基礎Ⅰ』, スリーエーネットワーク,
————— (1993) 『新日本語の基礎Ⅱ』, スリーエーネットワーク,
Osamu Mizutani/Nobuko Mizutani, 1977 *An Introduction to Modern Japanese*, The Japan Times,
名柄迪 (1990) 『JAPANESE FOR EVERYONE』, 学習研究社,
名古屋大学日本語教育研究グループ (1988) 『現代日本語コース中級Ⅰ』, 名古屋大学出版会
————— (1990) 『現代日本語コース中級Ⅱ』, 名古屋大学出版会
阪田雪子他 (1980) *Intensive Course in Japanese (Intermediate Course)*, ランゲージ・サービス

参考文献

- 蒲谷宏・坂本恵 (1991) 「待遇表現教育の構想」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』3号
菊地康人 (1989) 「待遇表現—敬語を中心に—」『講座日本語と日本語教育1』, 明治書院
北條淳子 (1978) 「初級における敬語の問題」『日本語教育』35号
国立国語研究所 (1992) 『敬語教育の基本問題 (下)』, 大蔵省印刷局
辻村敏樹 (1980) 「敬語と日本語教育」『講座日本語教育』16分冊, 早稲田大学語学教育研究所
日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育辞典』縮刷版, 大修館書店
宮地 裕 (1976) 「待遇表現」『日本語と日本語教育—文字・表現編—』大蔵省印刷局
————— (1985) 「待遇表現」『言語行動と日本語教育』, 凡人社

資料

< 談話における待遇表現の形式 >

資料 1-1 (尊敬形式)

	①	②	③	④	合計
変化形式	29	306	176	13	524
お-になる	358	124	133	2	617
お-になられる	15	6			21
-てくださる	35	66	17	4	122
お-ください	85	15	16	1	117
お/ご-	4	35	21	1	61
-れる/られる	197	50	57		304
お-です	56	5	16		77
-ていらっしゃる	13	143	88	2	246
お-くださる	9	3	11	3	26
-ておいでになる	1				1
合計	802 (1882)	753 (1275)	535 (975)	26 (57)	2116 (4189)

資料 1-2 (謙讓形式)

	①	②	③	④	合計
変化形式	267	244	202	10	723
-ていただく	445	84	45	10	584
お-する	186	80	46	2	314
-せていただく	86	47	5	2	140
お-いたし(ます)	14	13	8	3	38
-ており(ます)	37	40	116	1	194
お-いただく	13	7			20
お-申し上げ(ます)	2		1		3
-てまいり(ます)		3	8	3	14
-てさしあげる		4	2		6
お-ねがい(ます)	30		7		37
合計	1080 (1882)	522 (1275)	440 (975)	31 (57)	2073 (4189)

- ①『敬語と敬語意識-岡崎における20年前との比較-』
 ②『主婦の一週間の談話資料解説・本文編』
 ③国立国語研究所言語処理データ集4『談話語の実態』データ
 ④『日本人の知識階層における話しことばの実態』

< 談話における変化形式 >

資料 2-1 (尊敬形式)

	①	②	③	④	合計
いらっしゃる	19	97	70	11	197
おっしゃる		109	37	1	147
くださる	1	4	4		9
みえる	5	2	4		11
なさる	2	61	40	1	104
御存じ	2	2	4		8
ご覧になる		4	6		10
めす		5			5
めしあがる		16	4		20
亡くなる		6	7		13
合計	29 (296)	306 (550)	176 (378)	13 (23)	524 (1247)

資料 2-2 (謙讓形式)

	①	②	③	④	合計
いただく	126	67	29	5	227
あがる	2	3			5
うかがう	4	26	17		47
もうし(ます)	11	36	16		63
申し上げ(ます)	21	18	15		54
まいり(ます)	39	17	12	1	69
ござい(ます)	38	25	24	1	88
おり(ます)	6	2	33	1	42
いたし(ます)	18	40	42	1	101
存じ(ます)	1		5		6
存じあげ(ます)			1		1
拝見する	1	4	2		7
拝聴する			1		1
お目にかかる		3	1	1	5
かしこまりました		1	3		4
うけたまわる		2	1		3
合計	267 (296)	244 (550)	202 (378)	10 (23)	723 (1247)

- ①『敬語と敬語意識-岡崎における20年前との比較-』
 ②『主婦の一週間の談話資料解説・本文編』
 ③国立国語研究所言語処理データ集4『談話語の実態』データ
 ④『日本人の知識階層における話しことばの実態』

<日本語教科書における待遇表現の形式>

資料3-1 (尊敬形式)

	①	②	③	④	⑤	(a)	(b)	(c)	小計	合計
変化形式	4	8	1	5	11	12	6	9	56	113
	14	6	3	3	10	13	8		57	
お-になる	2	6	1	2	3	1	1	2	18	56
	9	1	3	2	2	8	12	1	38	
-てくださる	2	2	3	2	1	5	3	1	19	39
	5	1	4	1	2	7			20	
お-ください	1	1	1		6	3		4	16	27
					1	5		5	11	
お/ご-		1		1	4	2		1	9	20
		3	3			2	2	1	11	
-れる/られる		2			3	1			6	19
		6	3		1	1	2		13	
お-です	1				2		3	1	7	22
	4				1	4	4	2	15	
-ていらっしゃる	1				1	1	2		5	8
						2	1		3	
お-くださる	1								1	2
								1	1	
合 計	44	37	22	16	48	67	44	28	306	(636)
	(68)	(60)	(42)	(33)	(108)	(156)	(73)	(96)		(636)

資料3-2 (謙讓形式)

	①	②	③	④	⑤	(a)	(b)	(c)	小計	合計
変化形式	4	3	5	5	13	4	6	13	53	146
	8	7	4		15	35	4	20	93	
-ていただく	1	1	3	1	5	6	4	4	25	50
			2	1	2	11	3	6	25	
お-いただく							1	1	2	2
お-する	7	3		3	10	11	2	8	44	
	3	2	3	3	2	13	3	11	40	84
-せていただく	1	1		1		2	1	1	7	
		3	3	1	2		1		10	17
お-いたします		1			1			1	3	
						2		1	3	6
-ております				1	6	1	2	2	12	
お-申し上げます		1					1		2	14
		1							1	
-てまいります					1			1	1	1
									1	
-てさしあげる					2				2	7
					1	4			5	
-てあがる				1					1	1
お-願ひ(ます)							2		2	
合 計	24	23	20	17	60	89	29	68	330	(636)
	(68)	(60)	(42)	(33)	(108)	(156)	(73)	(96)		(636)

- ①『日本語 (にほんご/にっぽんご)』 ②『日本語初歩』 ③『新日本語の基礎 I・II』
 ④ An Introduction to Modern Japanese ⑤ JAPANESE FOR EVERYONE
 (a)『現代日本語コース中級 I・II』 (b) INTENSIVE COURSE IN JAPANESE INTERMEDIATE
 (c)『日本語中級 I』

<日本語教科書における変化形式>

資料4-1 (尊敬形式)

	①	②	③	④	⑤	(a)	(b)	(c)	合計
くださる	1	2	1	1	2	4			11
いらっしゃる	5		1	3	7	12	3	4	35
おっしゃる	2	1	1		3	4	2	1	14
なさる	3	3		2	2	2	9	3	24
御存じ	1	1	1		2	1			6
召し上がる	2	1			3	3		1	10
ご覧になる	2	1			1	1			5
おいでになる		1				2			3
おみえになる		1				1			2
おめしになる						1			1
亡くなる		1				1			2
合 計	16	12	4	6	20	32	14	9	113
	(30)	(24)	(13)	(13)	(49)	(66)	(22)	(42)	(259)

資料4-2 (謙讓形式)

	①	②	③	④	⑤	(a)	(b)	(c)	合計	
いただく		3	3	1	3	5	9	2	5	31
おり(ます)		1	1	2		1	2			7
いたし(ます)		1	1	2	1	2	2	1	1	11
さしあげる		1	1		2	3	4			11
申し(ます)		1	1			4	1		7	14
うかがう		1	2			5	2	2	6	18
まいり(ます)		1		2		3	3		6	15
かしこまり(ました)		1	2	1						4
存じ(ます)		1				2	1			4
拝見する		1				1	1	1		4
拝借する							1			1
申し上げます		1	1			1	1		1	5
お目にかかる						2	2	2	3	9
あがる					1		1		1	3
存じ上げ(ます)		1					1			2
ござい(ます)				1			3		3	7
合 計	14	12	9	7	29	34	8	33	146	
	(30)	(24)	(13)	(13)	(49)	(66)	(22)	(42)	(259)	

- ①『日本語 (にほんご/にっぽんご)』 ②『日本語初歩』 ③『新日本語の基礎 I・II』
 ④ An Introduction to Modern Japanese ⑤ JAPANESE FOR EVERYONE
 (a)『現代日本語コース中級 I・II』 (b) INTENSIVE COURSE IN JAPANESE INTERMEDIATE
 (c)『日本語中級 I』